

「生涯研修」の魅力は、自分で設計できること

内山 充

薬剤師が、生涯にわたる継続学習で自己研鑽に努めなければならないという考えは、今や広く浸透しています。学習には卒前卒後の区別が無くなったと言ってよいでしょう。しかし、卒後の生涯研修が卒前の大学教育と根本的に違うのは、それが「自己設計」で行なわれるということです。

大学教育の成果は、学生自身の努力と才能に左右される以上に、教える側の方針、計画、能力に大きく依存しています。そして、学生は原則として皆同じことを学んでいます。日本の教育の特長であり欠点でもあるのですが、共通の知識を、横並びに同じレベルに揃える教育になっています。国家試験でも、1課目が極端に低いと不合格になることもあり、最低限必要な知識レベルを得ることは確かに必要なことでしょう。しかしそのために、嫌いなこと、不得意なことの学習が常に強要される傾向が出てきます。

生涯研修は違います。あくまでも自己責任ですが、受講者は、学習課題を自分で選べるという自由な立場にあります。

最近では、先ず何を学べばよいか迷うほど、多くの種類（講義、グループ研修、書籍、雑誌、ビデオ、インターネットその他）の研修が提供されています。その中で、自分の好きな課題、親しみのある話題を選ぶことが、生涯研修の効果を高める基本です。興味が持てる、面白いと感じることで、頭が「入力・成果（Input / Outcome）モード」になると言われています。入力・成果モードにならないと、学んでも頭に入らず、たとえ入っても単に蓄えられるだけで、生きた知識には成りにくいのです。

大切な頭脳を、単なる情報の保管場所にしてはいけません。学習の価値は、学んだ内容や量ではなく、それが生み出した成果によって決まるのです。学んで得た知識が、何を意味し、何に使えて、どのような成果を生み出せるかについては、自分で考えることが必要です。そのためには、考える時間がなくなるほど情報や知識を詰め込むのは避けるべきです。最近流行の「問題解決能力」を養う教育というのも、そのような意味を持っているのではないのでしょうか。

生涯研修は、大学教育の補修ではありません。補修が必要な人は、先ず補修に専念し、卒業レベルを確保してから生涯研修についての自己設計を始めてください。

薬剤師には、あくまでも全方位型の実務責任がありますから、どんな学習でも無駄にはなりません。しかし、生涯研修は、将来の生きる道を築くものでもあります。生涯研修の蓄積が進むにつれて、それと平行して薬剤師の専門性を目指した学習が始まります。自分はどの分野が得意かという情報表示が、医療サービスの中で自らの知識と経験を生かすために必要となります。生涯研修における自己設計が、一生どこまでも仕事の中に生きてくることを忘れないでください。